

# ウェーブ

## 美術

村田 真

ウォルト・ディズニー社は愛らしいキャラクターを次々と生み出す一方、厳しい著作権管理でも知られている。そのディズニー社に挑戦するかのような企画展「ディズニー美術」が、5月の連休を挟んで京都のクレストアルツトというギャラリーで開かれた。アーティストは5人で、いずれもディズニーのキャラクターやディズニー社をモチーフとする作品を出品。

入江早耶は「白雪姫」「眠れる森の美女」「ピーターパン」の絵本を消しゴムでこすり、出たカスを色分けし、粘土のようにこねて三つの小さな彫刻をこしらえた。よく見ると、それぞれ白雪姫と意地悪な女王、王子とドラゴン、ピーターとフック船長を合体させた像になっていて、善悪二元論のディズニーワールドを皮肉っているようにも見える。これは見事。

フィンランド出身のピルビ・タカラは、シンデレラのコスプレでパリのディズ

### ■「ディズニー美術」展

ニーランドに入ろうとしたら止められ、着替えるよう命じられたという記録ビデオを公開。これは逆に人権侵害ではないか。

福田美蘭は「誰が袖図屏風」の形式を借りた新作を発表。「誰が袖図」とは衣桁に着物が掛かっている絵のことで、福田はそこにディズニーキャラが着ているようなカラフルな衣装を描き込んだ。対照的に手前の屏風には日本人が殺された中東の砂漠の風景をあらわに、冷や水を浴びせている。これは力作。

### 問われる自主規制

ちなみに福田は前に画集を出したとき、ディズニー風に描いた絵の掲載を巡って出版社とやり合ったことがある。メディアは著作権に触れそうな表現には必要以上に神経質なところがあり、それが「ディズニー社は著作権にうるさい」という風評を増幅させ、自主規制の悪循環を生んでいる面もある。しかし本家アメリカでは、ウォーホルやリキテンスタインらはディズニーキャラを作品に採り入れているのに、訴えられたという話は聞いたことがない。

同展を企画したクレストアルツトの岡本光博氏はアーティストであり、ブランドをテーマにした作品で企業から抗議を受けたことがある。その彼いわく、「本展にディズニー社を批判する意図はありません。アーティストの力を試す場であると考えています」。問われているのはディズニー社ではなく、アーティストの想像力であり、またメディアの姿勢でもあるだろう。

(むらた・まこと|バンカートスクール校長、美術ジャーナリスト)



福田美蘭「誰ヶ袖図」(左)や岡本光博の作品群(右と手前)が並ぶ「ディズニー美術」展

(撮影・澤田華)